

# 音の散歩路

～銚子・犬吠埼・海のざわめきと  
「牛の声」そしてモロミ達の歌声～



～ほととぎす銚子は国のとっばずれ 古帳庵～ 近くて遠いところ、千葉県銚子は東京から近そうに感じるが、実は遠い。やっと到着した千葉駅から、その先、普通列車で揺られること1時間50分ほどを要する。それもJR総武本線と立派な名前がついている線路だが単線であり、途中の駅は屋根なしは当たり前、幅1メートルのホームや雑草が列をなしてお出迎えといったローカル度である(写真-1)。車内の路線ネットワーク案内図を見るとすぐに範囲外に出てしまい、何のための案内図?と疑問符が点灯し、どこを走っているのかも



写真-1

分らなくなる始末である。やがて、突然!森の上に風力発電のプロペラが出現して海に近づいたことを知る(写真-2)。

銚子の駅は都会の趣であり、そのホームの先に銚子電鉄の駅舎がある(写真-3)。銚子から外川間全長6.4キロメートルの鉄道であり、一時潰れそうになったが、ぬれ煎餅などおみやげ観光強化策が実ってどうにか運行している。弧廻手形の日乗車券620円なりを手にして犬吠埼へ向かう(写真-4)。一両編成、600V駆動、冷房なし、途中ジャングル然とした森を抜けてテーマパークの列車気分である。

「犬吠」の駅はずいぶんと不釣り合いなほどモダンであった(写真-5)。歩くこと5分ほどで犬吠埼の入口があり、銚子半島先端の海が現れる(写真-6)。そして次に、青空にスクッと起立した犬吠埼灯台が現れる(写真-7)。明治7年に完成、高さ32メートル、100V400W



写真-2



写真-3



写真-4



写真-5

電球×フルネル式4面閃光レンズの光源は約40キロメートル到達する。灯台の先端には九十九里浜に由来するという99段の螺旋階段を上がる。石の階段の凹みから、幾万幾億の靴音が聞こえてくる様だ(写真-8)。さて、「牛の声」と銚子市民に親しまれてきた霧笛がこの灯台にある。今はその役割を終えたロスト・サウンドではあるが、ネットで聴いてこの様に巨大な物悲しい音を出すものは……と興味をそそられてやって来た。来て見て分った。この灯台の根元に霧笛舎があった(写真-9)。あの雄大で侘しげなる海の吐息に似た一音を発するために

は、大きな舎の中に空気を圧縮するコンプレッサー、圧縮空気を充填するエアータンク、圧縮空気を流し込んで発音させる発音体などの大掛かりなシステムが必要なのであった。通常は電気モーターで圧縮するが、停電など非常時はエンジンが使われたという。屋根の上に霧笛が顔を出しているが、そばで音を聴いた人は体が震えるような響きであったと述懐している(写真-10、表紙の写真)。霧笛舎の横には霧鐘もポツリと置いてある(写真-11)。青森県尻屋埼灯台に設置されていたものである。霧の深いときに打ち鳴らして岬の所在を知らせた。海の交信



写真-6



写真-7



写真-8



写真-9



写真-10



写真-11



写真-12



写真-13

には音が活躍していたのだ。でも今は眼下に広がる怒涛の波音だけが鳴り響く。

さて、岬を海辺から丘へと向かうと湧き水に出会う(写真-12)。源義経が頼朝に追われて銚子から奥州へ逃れるとき、矢を立てて抜いたところ清水が噴出したと伝えられている。長らく灯台守の生活水としても使用されていた。取材時は32度もある炎天下、冷たくてうまい、義経様に感謝である。丘に上がり銚子電鉄の線路を渡って犬吠崎とは反対方向にある「地球の丸く見える丘展望館」に向かう。その途中に満願寺というお寺がある。大ヒットした「トイレの神様」という唄があるが、ここのご本尊である烏枢沙摩明王は正しくトイレのご本尊なのである。でも、いまさらながらお寺には鐘や鈴など鳴り物が多いこと(写真-13)。神仏の世と現世とは音でつながっていますといった有様であ

る。そのお寺の脇の坂をあえぎあえぎ登りつめると展望館に到着する(写真-14)。展望台で360度ぐると回ってみると、確かに水平線と銚子半島の地平線が丸く円弧を描いているのみで、地球が丸く見える。330度分が水平線という。遙か彼方には高さ50メートル長さ10キロメートルの断崖絶壁である屏風ヶ浦が見渡せ、風力発電のプロペラが林立している(写真-15)。

再び地上に戻り、銚子に向かう。銚子といえは醤油、市内の飲食店ではヒゲタとヤマサと二種類の醤油さしがあるというが、今回はヤマサ醤油の工場見学(写真-16)。江戸時代の初めのころより醤油作りが栄えたという。寒流と暖流が銚子沖でぶつかり、湿度高く・夏涼しく・冬暖かいという気候に恵まれた上、できあがった醤油を利根川で江戸まで運び、帰りには材料である大豆と小麦を運ぶという地の利に恵まれ



写真-14



写真-15



写真-16

た。ヤマサ工場では1リットルびんで一日40万本つくるといふ。大豆と小麦と塩に種こうじを混ぜたモロミを6ヶ月間置く。種こうじとしてヤマサは何百年も育てた独自のヤマサ菌を使用しているが、こうじは各社でちがうという。このモロミが分解・発酵するとき音が出る。丁度、水がたまつた甕の中に雨が降り注ぐピチッピチッピチッという音に似ている。泡がはじける無数の音それぞれが生命の息吹を吐き出す合唱の響である。でも、工場見学は硝子越しでありこの音は聞けない「録音でガマンして下さい」である。このモロミを3日かけて絞って生醤油ができるという。

さてさて、醤油工場から銚子駅までは歩いて5分、ガラ空き車内の総武本線を教室と勘違いしている高校生の群れを横目に、まずは千葉に向かい帰路につく。今回はロスト・サウンドな

ど生では聞けない音ではあったが、音はこころで響かせることもできる。現場に立ちつつ生きた音に思いをはせるのも一興である。一日ではちょっとキツイ小さな旅といった音の散歩路であった。

(財団 江沢 記)

○「牛の声」は犬吠埼ブランドン会（犬吠埼灯台のまちづくりへの活用推進市民団体）のサイトで聞くことができる。CD「霧笛一失われたサウンド」も制作・販売している。

⇒ <http://inubo.net/brunton/aboutcd.html>

こちらは、犬吠埼周辺のいろいろなシーンでの「牛の声」が聞ける。

⇒ <http://inubo.net/windy/scape/20050612inubo/p0.htm>

ヤマサではないが、醤油のモロミが発酵中の音です。

⇒ <http://www.youtube.com/watch?v=VSgCRmcWJlc>